

## 亡命白系ロシア人としてのシオニスト

——白系ロシアとユダヤ・ナショナリストの思想的関係

鶴見 太郎

ロシア帝国におけるシオニズムは、10月革命後、主として3つの流れに分散した。第1に、パレスチナ開拓に向かった流れ。第2に、新生ポーランドにおいて、「一般シオニズム」の名を冠して、国内のユダヤ人問題にも取り組んでいった流れ。第3に、ベルリンやパリに亡命し、そこでロシア語で活動を続けた流れ。この流れは、主として、右派である修正主義シオニズムを形成していった。

第3の流れに関連するものとして、帝政崩壊前のロシア・シオニズムにおいて中心的役割を果たしていたシオニスト思想家の一人、ダニエル・パスマニクは、シオニズム運動とは疎遠になってまで白軍に従事し、19年よりパリで反ポリシェヴィキの言論活動に従事するようになった。彼は必ずしもユダヤ・ナショナリストとしてのアイデンティティを失ったわけではなく、依然としてユダヤ人の事情への憂慮を表明していた。では、彼をして白軍に向かわせた背景は何であったのか。

また彼に限らず、ベルリンやパリにてロシア語で言論活動を続けたシオニストも存在した。彼らは一義的には白系ではなかったが、白系ロシア人と思想的にも何らかの共通性が見られる可能性もある。

ユダヤ系の資料に関してはすでにかなり収集しているが、白系ロシア人の思想に関するものはまだほとんど未収集であるため、今回は、7月26～27日と10月23～24日の2度にわたって、スラブ研究センターを含む北海道大学図書館所収の関連資料の収集・整理を行った。特に、まずは最新の白系研究の成果を吸収することをめざし、関連する英露日語の研究文献や資料集の収集に努めた。1度目は一部工事中のために利用できない資料があったものの、総じて、関連文献がまとまっており、効率的に収集することができた。

白系時代のパスマニクについて分かっていることは少ないが、デニーキン将軍のもと、クリミア半島で軍医をしていたことは本人が書き記している。そのため、デニーキンについての資料を特に注意して収集した。

加えて、10月はアメリカ長期滞在中の一時帰国の折であったが、日本語文献を十分に収集できたのはなお貴重であった。

滞在中は、いずれも偶然センターの若手研究者たちと懇談する機会に恵まれた。資料は最悪コピーで入手できることも多いが、こうした機会は「オリジナル」に当たる以外にない。短期間であったが印象深い、充実した滞在となった。

最後に最も重要なこととして、滞在に関して様々なご支援をいただいたセンターの方々への感謝を書き記したい。